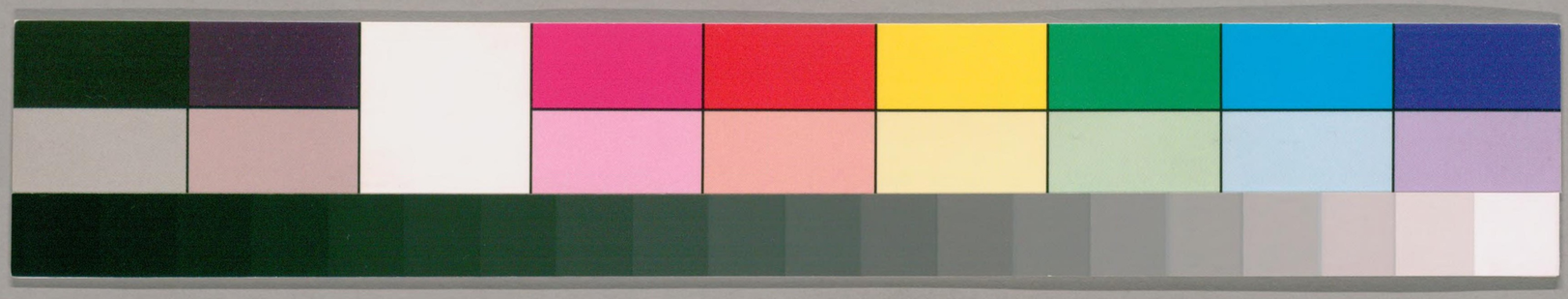
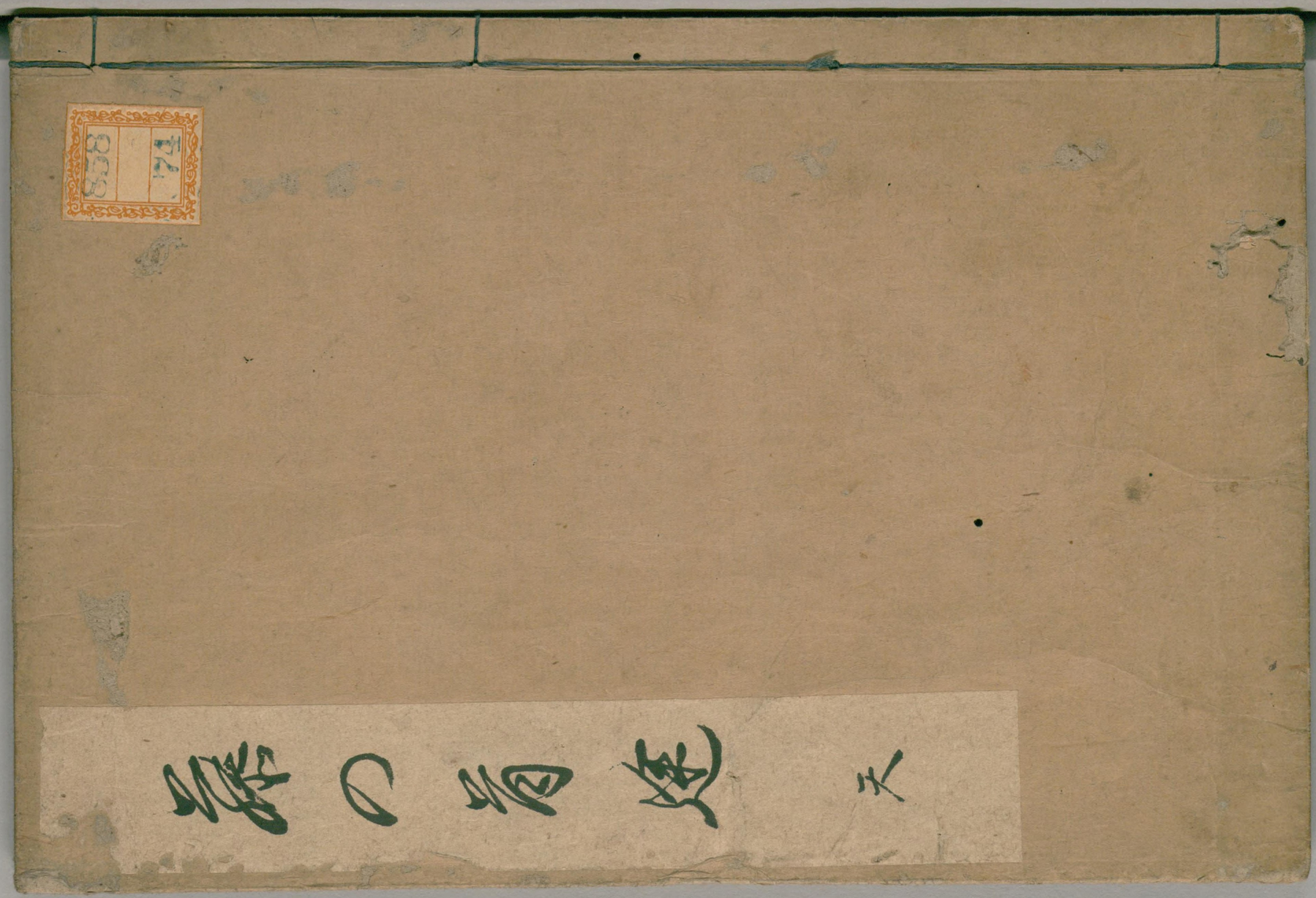




ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『藤の首途』　請求記号 858-74

858-74

藤の首途

餞別辭

蓮二房

享保のことし弥生の袖なれ雪し夜霧
うへをきてなりし筑紫の川柳を思ひ
きてしむこと故いかむとしたれ家かけて
そこの旅寐は一夜二夜のちきりなるに

国立国会図書館　タイトル『藤の首途』 請求記号 858-74
ガラス使用

禅袍の情とむすぶ御とゝいふ事なりし
かゝて年月とかゝふるに既に三十余年
なれ居し我やゝ古稀にちかきれはいふ
者とあれはなりひこ国の残鈴ひに蛋の
笠屋の夕部をしく此国を山路うちに
木樵か者の俗家もおかしまし高風雅に
来れるくてもむかしく一万里のおもひ絶
無きて渭樹江雲の情とよきなりかり

世ゆへに此法師とまて先くこ国こまくに
保まらいまとへい方士か客とかりて巴暁か
裾とうはせれかことくまけこしを山義山の
きうひの者とかゝんとなりいさけらハ
とて送りしれこしの名称の名あるく
いはしか越路のたなむけに春の首途れ
たなやうなりしも今まて蓬莱の別を
とて者の首途のたなけかなさいつれか

国立国会図書館　タイトル『藤の首途』 請求記号 858-74
ガラス使用

ものちりてちらんと思ふは草のいと
さみしく生の葉末の露ためて
なしくれとみひさしうれてなむ

帝國圖書館藏

源氏行

山県連中
蓮二層

真むのゆくや鳥藤三百里　里紅
空よ露の雲高くなし　里紅
君が代を草餅の飼よ祝ふさて　六芝
夏は世帯よ伯母の説法　栗几
川越の霧ちめれて庵は有　東羽
とうて春ふてあきゑんとや　白旺

ウ

行燈もとりさせ床裏い月の影　泊楓（長良連中）

芋煮る鍋の曲（ソ）寂（ド）にかたらぬ　里和

山鳥もまた宮人の衣裳ほさ　呂杯

お大工店の口もやかたぬ　梨雪

照あれ蓑の日輪の雪になり　有琴

草蘭とめしを朱泥の鶏　望風

お家うしをやせ隠居の掃除好　桜岡（岐阜連中）

猿の酒みに花時のうしらく　アヽ和

川むかひなれば住もたてぬ苔　水胡

新地の市日笠人をいふ　吏荊

春もまたまたい内うしむのさて　童平

彼岸の仔をは偶ふ笠紙　帥古

二

栄（アサ）蓑（フキ）の盆と酢味噌に舌まぎて　与条（新加納連中）

お蜀鳥のうらもたまえぬ柳戸　里紅

春夏冬の雪踏をおもせ半ばへ　如柳

天満橋うしまたもちらく　野鏡

伊勢講のまゝにいつても好有り鳴　侃和
初灯花にくらき　義訓　斧山
蔵人もあるしまゝ婦にいとけれ　笠松連中　達支
りしを　裕を　祝ふ　初白　了和
親音の名の流るし　町の中　摩山
訴訟の祖父の家柄にて　楚流
稲の名は雅しきまゝ　鳥の月　荷丁
名の節に　歸ふ　輝まれ　箕由

二ウ
君父入の神にお城の噴りして　竹ヶ鼻連中　規公
名は雅しの様　摩こをくる　里紅
灰吹も捨てば又世のたとき　盆　作角
霖鎖る　雨君　晴れ　遊び日　落伴
小鯛法る　演き　寄の月　其栢
まりもてあそ　ちの　偽和　馬童
雇人のある名をいはぐ　長ナガ　大恒連中　半茲
湯殿あきれ　雪　隠に　嘆ク　里和

濤ても かくせと 産の小呼き　隆五
宗ちて 馬に ちらむ 明星　東孝
笞揚く 飯焼 むの比 厳和 行し　三伍
うちて 君に 不化の 餘 氣せに　百什
三
逗留に 二日 魚と ちられ　神戸連中 李仙
保え 宗治 さがして 袋戸　里紅
漏 痛も きれに 暫り 飛鳥川　伯村
故も 所り 乗く 木貨 倫き　岩石

豆腐 枕 ちに 月 起と 起てくれ　本公
東屋の 裏も 分むの 村　桂碩
伊尾連中
汚そひ あふ 狂い 仲百の 手習子　越水
罠 ひ ちに とも 伯 花を 夜　里紅
山 ちて 寄く 小 角の 胃 夜　足巳
ひりし 以 時に 光 栗 清ても　鶴升
母の 手を ちに れて 繻子も 雖 ない　秋雲
猫も 火 焼の 連を ひし 夜　揚波

国立国会図書館　タイトル『藤の首途』 請求記号 858-74
ガラス使用

三味線もきえぬ師をのぞひ寺　琴左
神桃灯に　雪の　相傘　つれ
商ひと意とに人も鴎まらひ　退く
伊豫の心祇の日和ひくゝ飛る　比柳
ひとしきる靜と土産にむの雪　雪仙
柳も笑る　うくひすの笑　葵的

享保貞代のまち蓮者人の爺に戀して
筑紫行脚とおもひきらぬ我師の
漂泊も三十余年の昔にして旧吏の
風雅もなつかしきれバと頻に進め給へり
しかしや餘にして烏藤校を拵ゑ
こち校にこちむと呼ぶとしたく今くまるの
眉目にして師徳と廣むりの時なんか
あとくきらぬひの筑紫に波のよりくそ

たとえもうし後に青山さん楯と
住きて松子に杜丹のかをりゝ里子里
敬をくきと以後の師弟の以後も
此時の首途なれ無し。

庚元坊 里紅

こまらに云ふる程家や此年之事
此のあり

近江

都に越くれたまらなれ湖東の
佐角亭に一夜を明して

アキ

故郷こしに吟や三上の郭公

貴嚴主人い花のそ途に東小の
行脚ありて今まで西国の此行に
友のそ途をゆしまれ

筆とおれや首途の松のまけ

佐角

国立国会図書館　タイトル『藤の首途』 請求記号 858-74
ガラス使用

活陽

夜のそ途と卯月の
ひかた見して　柳好室を
百河

活生かし踏れ夜の波行かな
知とあしは踏ぬきの雲　里和

お聖とも豆腐の家と讀ゑて　山只

各題送行路程

到才五橋

五条まで橋のこゝかれそまで岩　花宇

到大佛

大仏や夜かくこゝしまの雲　素古

到稲荷

かしこさに鳥居を越るなれかな　桂州

到夜表

夜ゆへ卯月の夜北そ途に　吉由

到伏見

卯のあはぬしつゝの月と名付に　杜吾

摂津

難波の浅生高と
為ねて
里紅

蒼々と月やあくさめて夏細
二百里おくれ故郎の細門　野坡

西宮川筋の先金と
祝し給ふ

杖なりし尼ゟ嶋へゟ雲ゟの峯　梅従

尼ゟ嶋より一里ゆくりあまて里ゟ多
今津といふ不ありけり浜の柳原里とより姉と
浜ゟ是きゟゟ此里い池田伊丹の名ト蓋ひて
おのく酒造と業ともれいこと給を
祝して

酒蔵やむ橋の一を新

しかしく此浦里に旅の宿を
なくさして

川かみれ六(ムコ)兒(コ)の入口やまちの菜

武庫の入江漕くとむかふに清水山
見へ流りせる南菓亭に勝望して
一夜のあけらや浜にはしあれ

短冊行

あしきまれ新や書の市比風　焉哉
名起祝ふうきね帷子　里
京都の様に女中のまと流く　一滴
山あきらく菓の高さ音　呉張

名月の唯に高くも芋の俳　南菓
お樓の裏見もうやうさる　哉
お賢の杖きて高き書子聲　石
雅也以れく者の裁もの　滴
童笛とうめて童ちる笛ぶ　張
ぬり飽くやうしてうく　菓
名のあれも名のなれ山もむ靈　哉
田うらも家とらむおこ家頭　石

二

也哲の婦を先を見ましてをれ　滴
和銀書に日の暮れまして　張
村前に喧嘩のおこり静りて　菓
喜地にあらず地を更すり　哉
風哲の居も家中も貧乏さ　行
家のうちにもあいね深もの　滴
お盡思しおなるに月も夏でも　張
猶のもとりの明るを守れ　菓

ウ

即ちにもあらず酒をかり　哉
白粥に皆　草ふ　銀壽　行
おれありく猶のんもふに餘　滴
猶草に旅ふ神もいろく　張

谷録

文机のさきや物をさて　正義哉
故郷にまして風雨のきや初月お　一滴

鶯に留まるかんて山ゐる沙子ゐ　桃梨
桂木の山乃世やちの夕　涼　南菓
鶯囲扇の謎とさらけて鶯ゐ　呉張
手まくらのたのしきし時や杜鵑　美由

餞別

高路の柳と曲れ清ゐるゐ　一滴
蕉のたふにこそかゝれ一雨鶯　南菓
橋の香にまゝあこうぬ高れるゐ　呉張

去詠も五月を咲る夏清亭　正字哉

今ほと立山て須戸の方に趣くは
くくに入道を得りて

萍のうきに寝桂せよ須戸泊

雨の高に清ゐ

神も釣せれく柳の池涼し

須戸の浦とるゐ田植の
さりなれば

清ナノの蜑も乙女名をかりや田植笠

一の名にて

茶の名は一本ノかと名ハ[illegible]

擣麿

今宵そ明石に行くれて

有鶏帰明石をまりや青の間

名はかふ尾上の鐘も変なれハと

志りしく菓底に行といねて

祖父のまも世話し第にちり松原

此日順禮の道者に住ふ玉を山神の露図なる

よし志りしハ風葉嵐七と云る人をしれるやと

君ハ行るまいらもしまれし此もそり

おとに中にもあきおのこの我ひ浴と桜の

先にかけて志りしくのあるをけるもなと云れ

ふさしのいとられしく笑行るこちらに石を

宝殿曽根の根をと一つ下袖をあらこ浴

姫浴に入ぬ

姫浴

国立国会図書館　タイトル『藤の首途』　請求記号 858-74
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『藤の首途』 請求記号 858-74

ガラス使用

六月末の雲の合点と星の照　　廿五　史幸

旅のよこれの神は枕のむ　　里紅

たしめくまくなくしきさくの
おかくりあるは　　知章

ひゝ目にも嬉ぬもおりしあれむ

夜う腰かくに　　雲の　　里紅

かくれおきたとくは照らやあのむ　　東支

笠のりの乗りも春の穂かくれ　　つゝれ

あと浣雲は昨夕や凉しかれ　　虚舟

あてゝくなれて風の雲火　　つゝれ

ちかく見路は夜路く春清水　　傳舟

雲の絵へは先　　頼の　　つゝれ

主席は漏れ絵をいと　　文通ありて

こゝろも詳しく黄ハむものとあの事　　所雲

なきあれは　　和とて　　つゝれ

国立国会図書館　タイトル『藤の首途』　請求記号 858-74
ガラス使用

きのふハみちのくの飯坂の宿と偲れて
けふよ出羽のころ行とさらし

佛ひめりく身や藤のうちこう行

龍野

春辛に宿と
ころされて

松の名や国風に藤くれの山

此地よりさくら路るてまかれハゆかさにて吹く
ちかうて侍おのうちく藤さ行れ

備前

五十月の初よりん岡山の城下に入て藤を
よき宿に藤ちらし春の占を
旅篭屋にやとりて

お駿や々し梅さき君の新わ

ゆれハ備中の宮前に藤んとこくより
立行われこの在のそゝりかれ吉備津宮よ
かゝりて

吉備ん大藤門のすま花さ

侍中

吉侍の中山と聞えてこゝろは侍中の
吉侍は家にしまれ一神二應とかや
氣あるものは御供料と御ふまつる
御釜と燒也侍るは其釜鳴動して
其氣むかしき時はかゝりて鳴動する
事なりし此御山の神秘にして
そらふとかりき

餘の音も流ふや御釜の
山びゞき

会賀の何来河生笠はそれより君日も
遠うしき思ひさなりあるしのもてしは
其途の旨とこゝろ

あとしの首もうれし袖まつ幸

義里亭に旅ふ

村雨の足れし深し桐のうへ

其ふは水室とこゝろふんとて百濱亭に
泊しひ書侍るうあるしは袖を見ひ
餘れりし以さりこゝろと祝して

まつ君の柳下をれりし氷餘

其業を柳笠の二子に以て三絃豆に
あそふ事ハ我ハ流れ夕月の氣も以て深やう
なれハ炉冶の戸をもつて石をも豆を
斷し鶏に黄金のもしきをも深くこく
今青い衣をおふ袍周金のもし先なれハ
むかしの風流も志きりに忘ひ此ものなれハ

川々智の都もまりしゆきこと

素柱子の隠忠を訪ふ

日暮き日をかられ行の奥雅綱

短冊行

籌翠やれ音はかりて泡つくひ　籌里

仰んも霞翁子に掛ふ事かれ　里紅

二合にお城の鐘と呼ぶれて　松邑

表家をとき小石の琴彫　柳笠

ナ

名月もなく輝家　芦園

菊ゆ物ハ　淺和

国立国会図書館　タイトル『藤の首途』　請求記号 858-74
ガラス使用

冷くと廂の陰の裕うけ　百濃
濃の地蔵も歩けも祇路も　三稲
千鰯喰鳥も喰ひ寝ふかより　白鬼
高と一家に門の洗足　故要
ひと枝に日うけに喰て蔵のむ　面覽
名さく娘菓の笠に跡蘇ひ　其蓮
一晒橋家ゝ蔵も笠をよりて　和
家屋とて家の重なる　里

朱かりにちの集話の仲間入　笠
春に時雨の沈んさまかしき　邑
赤ひ地蔵せくうかりしてり船　和
西瓜まつりの橋をゆるなり　圃
内所を相手本家れ月の氣　猿
子をこさせ給に菓の喰家　濃
7 雨ふてゝ垂けぬ小豆の餘燒て　要
日和あかりの仕るすかいなく　彦

名刻とまでにむの風しきす　蓬
[illegible]も[illegible]も餘くの連　質

名録

靜けや柳さへ風のみなかる　松邑
日の園やまさしき[illegible]なかる　三蓬
あるそハね世や[illegible]の[illegible]　三絵
風や片脇ねいくまさしす　柳笠

[illegible]も[illegible]しいる法[illegible]　芦岡
竜[illegible]けそ此界も朧月　百濱
[illegible]や口切に[illegible]時　橋本
末[illegible]も[illegible]の雨や田植時　簑里

餘[illegible]

うし[illegible]頁くち[illegible]　松邑
唐士も日傘に加へ[illegible]時　其蓬
涼風や[illegible]の雨の一[illegible]より　簑里

高原に海河といふ人きりむ路の行りし
一万支亭に夜とまれく

海と河の中に世界や流れ庫

夜新月中に玉鏡の濱に入て松為平に
たとはれ侍る庵のそこにまゐれも光あらねば
夜葉を皆候ひして莊に桔梗のむしも
そまさかなりしにいらく長途の
親相とはなり

海の山にそよきに濱の杜をし　里紅

夜波猶とむまふさらし井　文卅

夜を風に嫌ひ夜にそはむるて我
二夜房に里に風人と住ふ　二夜房

海中を百歳もうりそ三度流ふ
蔦葉に夜と山さ忘れ夜　里紅

此日を遊風もよ侍しまれいと葉かるはなり
讃岐のうらへまゐられ新宮を金毘羅詣の
道右丁楽人山さよひの新に海山にかゝりて
深しさいふ計なし　三中に三十(ミソジ)ばかりある

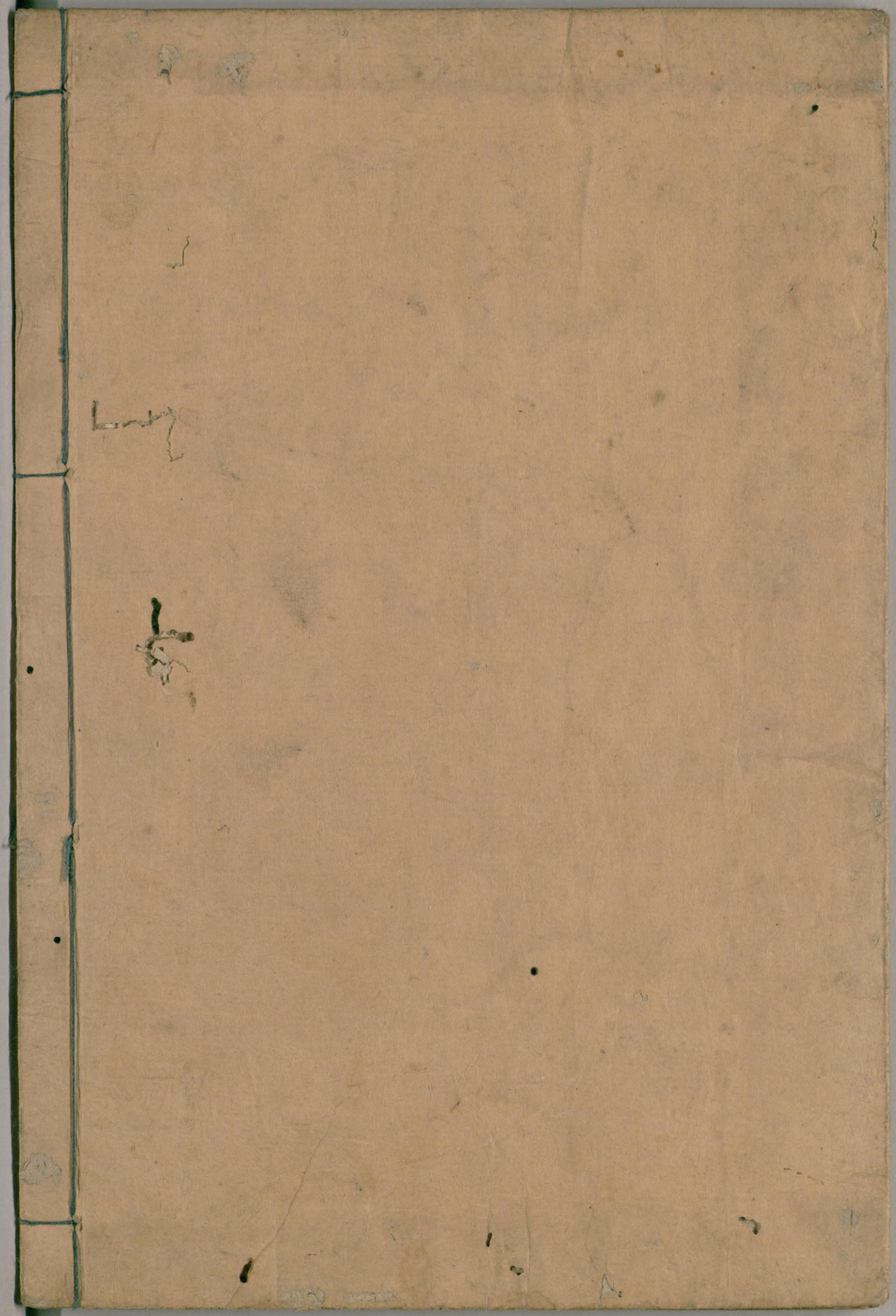
女房の酒のミ分うしてひと列さる酒の
悟けなるやうに思ひれ給ふ事ハ又かゝれ
私中の風流なるべし名におふ所謂と
まれあらり見えて法れ事に情趣なるひより
風さら流書ておくやうなら須一先山陰に
私と掛んといふに私人の心れ家有私を
遠に漕ぬをたり此私計とまるつきやう
なりしとさく官前しまる中に氣質なる
男の妙をおのれ意地ともておれくの難家と
かへりこさる事の面白なりしいさまに

あへれさいやそ心せんの女れまとアへて彼
女神にまさうりなるひ此私あやまちありとも
出身ひとりまゝかきれまし輝りまへと
もあかれに私人も此云ふに面を祈らけ
色をなとしてむりしより今民産の名の
私掛しまちる事なし贈相手にかゝりて
いさゝまへといふに私中うるひて諷ふ
私をうるの花かことく詩の口傳の地に
思ね事なんに法しまれ女の男にも
似たもて法先さる風情と私こそりて
感しあへるに分ちて積まり引まして

858
74

国立国会図書館　タイトル『藤の首途』　請求記号 858-74

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『藤の首途』　請求記号 858-74

ガラス使用